

変化する伝統 その動きと今後

埼玉大学教授

八木 正一

1 伝統と変化

私たちの人生はもとより、何事にも「はじめ」と「おわり」がある。そして、その間で物事は常に変化し続けている。私たちが伝統音楽と呼んでいるものもその例外ではない。生まれた時が必ずあったはずだ。そしてそれは、つねに変化し続けているはずである。

しかし一方で、「伝統音楽は変わらないもの」という認識がある。だからと言って、伝統音楽は変化しないものではない。ただ、その変化のスピードがかなり遅いだけなのである。そうした伝統音楽にも、じつは大きな変化の波が押し寄せていると言わなければならぬ。

日本の戦後の経済成長は、私たちの生活を豊かにしてくれた。しかし同時に、よい意味でも悪い意味でも私たちの社会を一変させてしまった。六〇年代からの高度経済成長期以降、都市への人口流入が続くことになる。都市が勢いを増すと正反対に、地方はその活力を失うこととなった。こうした中で、「町おこし」「村おこし」といった形で地方の活性化が大きな課題となっていくた。

勢いを増した都市も数多くの大きな課題を抱えることになる。そのひとつが、新たな共同体づくりといった課題である。結びつきを失った都市の人々の間にどのようにして共同

体をつくるかが問われつつ現在に至っていると言わなければならない。

このような地方の活性化や新たな共同体づくりという課題解決へ向けて、さまざまな取り組みが行われるようになった。このような動きの中で音楽は大きな役割を果たしてきた。たとえば、地方では伝統的な祭が復活したり、また都市では新たな祭やイベントがつけられるようになり、そこでは音楽が中核的な位置を占めることとなった。また、さまざまな形での音楽による町おこし、町づくりを行う自治体も目立つようになってきた。

このような中で伝統的な音楽を足場にして地域の新たな音楽が誕生したり、途絶えていた伝統的な音楽が形を変えてよみがえったりするようになってきた。まさに、伝統音楽は変化の時を迎えているのである。

2 新たな伝統のカテゴリ

そのような動きをいくつかに類型化してごく簡単に変化のシーンを映し出してみよう。

新たに地域で祭やイベントがつけられる際に、たとえば、「〇〇太鼓」という形で日本の伝統的な太鼓を使った音楽が創作されることはよく見られる。これなど、新しい動きの典型であろう。これらは、いわば伝統のかおりをまといながら新たにつくられる伝統という

ことができよう。じつは、古くから伝わる伝統的な祭や音楽だと私たちが考えているものも、過去にはこうしたシーンから始まったものも多い。

そのような新しくつくられるものと対照的な動きが、たとえば、各地に広がるようになった阿波踊りであろう。この火つけ役的な役割を果たしたのは、東京高円寺の取り組みである。高円寺阿波踊りは、昭和三十二年に商店街の青年部が始めたと言われている。まさに町の活性化の手段として取り入れられたものであった。最初は、阿波踊りとはかなり異なった踊りであったようだが、本場の踊りを吸収しながら独自の発展をとげている。

たとえば高円寺阿波踊りのような例は、いわば既存の伝統音楽に寄り添いながらそれをもとに新しいものをつくっていくものとして考えることができる。途絶えていた伝統的な祭や音楽を復活させる形で新しいものをつくる例などもこのカテゴリに入ると考えてよいであろう。

三つめの典型が、本特集でも取り上げているYOSAKOIソーランであろう。今や全国に広がっているこのYOSAKOIソーラン。そのルーツは、高知のよさこい踊りにある。詳しくは本特集を参照いただきたいが、この特徴は、いわば伝統と現代のフュージョ

ンというところにある。よさこい節、ソーラン節とロックなどの現代的な音楽や動きがまさにフュージョンしてつくられたものである。よさこい踊りにしても、YOSAKOIソーランにしても、当初は、若者の心をとらえたものであった。しかし、全国に広がっていく中で、それは世代を越えた新しい文化になりつつある。今や新しい伝統音楽のひとつになりつつあると言っても言い過ぎではないだろう。

考えてみれば、YOSAKOIソーランにかぎらずこうした動きは、一九九〇年代以降ひとつの潮流ともなってきた。よく聞かれるようになったコラボレーションという言葉にそれが代表されていよう。この背景のひとつには、グローバルゼーションの進行の中で、文化的な他者との関係をどうつくっていくのかという現代的な課題を想定することができる。異質なものが対等の関係で出会う、そこから何かを生み出していくことは、現代的諸問題を解決する際に重要な意味をもつ。

YOSAKOIソーランの遠景に、異質な文化の突き合わせから新しい文化をつくり出していくことの意味が音楽にも問われるようになってきたという状況を想定してもそんなに間違っていないであろう。YOSAKOIソーランのような新しい伝統づくりは、こ

のようなシーンの中にあると言つてよい。

3 これからの伝統の形

一方で、やはり伝統はかたくなに守られるべきだという議論も多い。それも然りである。かたくなに守るといふ姿勢で少しづつ変化していく伝統音楽も重要である。

しかしだからと言つて、それ以外の新しい伝統のあり方を否定する必要はない。伝統的な祭りや音楽であっても、それをさかのぼつていけば、誰かが新しくつくった「はじめ」の時期があったものも多い。だから、今生まれようとしている新しい音楽的な試みもいつの日か伝統的な音楽になる日がきてもふしぎではない。

伝統は形ではない。たとえば、私たちが宴会の中締めで何気なく行う一本締め。考えてみれば、こんな日常にも私たちが伝統と呼んでいるエッセンスが詰まっている。少しずつ変わっていくことを認めつつ、私たちの文化の特徴を見つめ大切にしていくなかで伝統なのだ。

新しく生まれるさまざまな試み。それを新たな伝統として育んでいくか否かは、同時代を生きる私たちなのである。このことに自覚的になることが、伝統音楽をめぐる新しいシーンの中で重要になるだろう。